

# キリスト教神学

## 第1章 神学とは何か

一宮基督教研究所  
安黒務

1. スタンダードな『キリスト教神学』を教えうる弟子作り
2. 予習: 『キリスト教神学』を学ぶ備えをする - 目標の半分
3. 講義: 時間の関係で、『キリスト教神学』の輪郭とエッセンスを学び、要点を掘り下げる
4. 復習: 各自が卒業後、『キリスト教神学』を派遣される諸教会で、説教準備・聖書研究会等で活用し教えるノート作り。
5. 将来: 各自が『キリスト教神学』をベースに所属教派の脈絡にあった講義レジユメを作成し、『キリスト教神学』を教えうる弟子をつくる。(最終目標)

# 「キリスト教神学」 概略

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. 神を研究すること  | 7. キリストの人格  |
| 2. 神を知ること    | 8. キリストのみわざ |
| 3. 神はどのような方か | 9. 聖霊       |
| 4. 神は何をなされるか | 10. 救い      |
| 5. 人間        | 11. 教会      |
| 6. 罪         | 12. 終末      |

1. 90分でひとつの章を学んでいく。
2. 12部60章の学び - 通常の科目の12科目分の分量に相当する。
3. ひとつの章を学ぶを学ぶときに、12部60章との関連で思索する訓練をする。(“反芻”の訓練)

# 第1部 神を研究すること 概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

1. 各部を学ぶときも、その中の各章相互の関連性を“反芻”する。
2. 各章の「目的」「概要」「研究課題」「概略」の箇所のみを繰り返し通読することは有益である。

# 第1章 神学とは何か 概略

1. 宗教の本質
2. 神学の定義
3. 神学の組織図における組織神学の位置づけ
  1. 組織神学と聖書神学
  2. 組織神学と歴史神学
  3. 組織神学と哲学的神学
4. 神学の必要性
5. 神学の出発点
6. 学としての神学
7. なぜ聖書なのか

1. ひとつの章の「概略」をみて、その構成内容のポイントと展開を概観できる。
2. それらを図示することは理解の助けとなる。

# 序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

1. 「研究課題」は、この章の学びを整理したり、掘り下げていく上で大切なポイントである。
2. ひとつひとつの「研究課題」を小レポートのかたちでノートの中にまとめておくこと。

# 第1節 宗教の本質

1. 人間 - 癒しがたいほどに宗教的な存在
2. 定義できる者がほとんどいない事柄
3. 共通した特徴
  1. 世界観・人生観
  2. 信条・教義
  3. 世界観としての性格付け
4. 宗教の位置づけに変化
  - カントの著作への反動
5. 宗教をどのように捉えるべきか？
  - 指導者の名のもとにある構成員
6. キリスト者であるとは何を意味している？
  - 信仰箇条、諸経験、社会的次元
7. 神学の宗教に対する関係
  1. 神学に関する他の違った概念
  2. 宗教を主観的なものとみる見解
  3. 文化的言語的見解
  4. 教理 - 神についての真の知識、宗教 - 知情意の全人格を含むもの

1. 「比較宗教学(宗教の神学)」参考文献として稲垣久和著『大嘗祭とキリスト者』いのちのことは社
2. 「比較宗教学(宗教の神学)」講義レジュメと講義テープ、一宮基督教研究所にて販売
3. 「キリスト教人名辞典」日本基督教団出版局、において、神学者・哲学者の背景・経歴・著作等を簡単に書き出しておく。
4. さらに詳細な方たちは、「キリスト教組織神学事典」教文館、「現代思想を読む事典」「現代哲学辞典」講談社現代新書等がある。
5. フリードリッヒ・シュライエルマッハー：1768.11.21-1834.2.12、ドイツの神学者、「近代神学の父」、宗教の本質は「直観・感情にある」とした。
6. ルドルフ・オットー：1869.9.25-1937.3.7、ドイツの神学者、宗教学者。シュライエルマッハーの宗教哲学の影響を受け、「聖なるもの」を出版。比較宗教学的博識をもって、宗教的体験を分析。その本質として、戦慄させるものと魅せるものを同時に自己の中に統一した、非合理にして畏るべき絶対他者が存するとして、これを「ヌミノーズ」と名付けた。
7. イマヌエル・カント：1724.4.22-1804.2.12ドイツの哲学者、批判哲学の創始者。論理学・形而上学の教授。D. ヒュームの懐疑論に接し、従来の形而上学的論証の確実性に疑いを抱き、人間の認識能力の批判的検討の必要性を痛感。主著『純粋理性批判』で、感性的直観の対象(現象)にかかわる自然科学は学的確実性を有するが、知性的直観の対象(物自体)に関わる形而上学は学として成立せずとした。しかし、『実践理性批判』では、道徳が成立するためには、形而上学の対象(自由・不死・神)が実践理性によって要請されることを論じた。他律を排し、自律を重んじるその哲学は、啓蒙主義の風潮の中で大きな波紋を喚起した。
8. アルブレヒト・リッチェル：1822.3.25-1889.3.20、ドイツのルター派組織神学者。組織神学の倫理的視点による再建に向けられる。カント的な形而上学批判と道徳的キリスト教理解に帰ろうとした。自然科学的世界観が宗教批判的になるのに対し、形而上学的思弁ではなく、神と人との倫理的な関係に根ざすキリスト教原理による精神的支配の確立こそ世界を救う道であると主張した。近代神学史最後の中心人物である。
9. プラトン：BC427-BC347、ギリシアの哲学者。ソクラテスの弟子。アテナイの名門出身ではじめ政治を志したが、ソクラテスの刑死が契機となり、哲学に向かう。アテナイ郊外に学園アカデメイアを創設、研究と著述に携わりつつ、各地から集まった青年を教育し、アリストテレスら多数の弟子を育てた。...感覚によって捉えられ生成・消滅・変化する現象の世界に対して純粋な思惟によって認識される永遠不変のアイデアの世界を対置し、善のアイデアを頂点とするアイデア界こそ真の实在であり現象界の原因であるとするアイデア論を中心とした思想を展開した。
10. カール・マルクス：1818.5.5-1883.3.14、ドイツの社会主義の祖。数代にわたりユダヤ教のラビを輩出した家系だが、マルクスが六オのときに父はプロテスタントに改宗した。ヘーゲル左派の影響のもとに反政府的なライン新聞の編集に携わり、弾圧を避けパリに移住、まもなくロンドンに亡命、同地で没する。F. エンゲルスと親交を結び、ドイツ古典哲学(特にヘーゲル)、イギリスの科学経済学、フランスの社会主義思想という三要素を独自に総合した弁証法的唯物史観によって歴史を分析、経済活動が歴史を形成、経済活動のもとに階級闘争が生じ、共産主義がその闘争を終結させる、と主張して、人間の全的解放を目指す。
11. ジェイムズ・オア：1844.4.11-1913.9.6、スコットランドの神学者。一致長老派教会神学校で神学を学ぶ。教会史・弁証学・神学の教授。彼は自由主義神学の隆盛期にあつて「穩健カルヴィニズム」の立場をとり、またリッチェル神学の解説者として、イギリスとアメリカの神学界に貢献した。主著は「キリスト教的神観と世界観」1893。
12. グスタフ・グティエレス：1928、ラテン・アメリカの解放の神学者。キリスト教民主主義に失望し、ラテン・アメリカの経済的・社会的低開発状態の分析にマルクス主義を用いて政治活動を行なう聖職者の代表的存在。主著は「解放の神学」1971。貧しき人々は抑圧された「社会階級」であると同時に、「神の言葉の担い手」であるとし、農民や都市貧困地区住民の視点による歴史執筆を訴え、「開発」ではなく、「解放」を主張。
13. ジョン・ヒック：1922.1.20、イギリス(アメリカ)の神学者、宗教哲学者。1953年長老派牧師に授手。後にコーネル大助教授、プリンストン神学校教授、ケンブリッジ大講師、等。著書に「神は多くの名前を持っている」等、多数。
14. ジョージ・リンドベック：

## 第2節 神学の定義

1. 神についての研究、あるいは学
2. より完全な定義
  1. 聖書的
  2. 組織的
  3. 文化と学問で扱われている諸問題
  4. 今日的
    - 直面する問題やチャレンジについて語る
  5. 実際の

# 第3節 神学の組織図における 組織神学の位置づけ

1. 広範囲に使われている用語
2. 組織神学と聖書神学
  1. 聖書神学と呼ばれる“運動”
  2. 聖書の神学的内容
    1. 純粋に記述的なアプローチ
    2. 「真の」聖書神学
  3. 聖書的な神学
3. 組織神学と歴史神学
  1. 共時的アプローチ
  2. 通時的アプローチ
  3. 「先入観」「前理解」というフィルター
  4. 時代のイデオロギーをどう用いるべきか
  5. 思想や主張について評価する手段を得る
4. 組織神学と哲学的神学
  - 哲学の神学への貢献
    1. 内容を提供
    2. 弁護、あるいは確証
    3. 概念や議論を吟味精査

- 1.カール・バルト:
- 2.エミール・ブルンナー:
- 3.ジェームズ・バー:
- 4.ブレバード・チャイルズ:
- 5.クリスター・ステンダール:
- 6.ヨハン・P・ガブラー
- 7.トマス・アキナス:
- 8.アリストテレス:
- 9.ジャン・カルヴァン:
- 10.アウグスティヌス:

## 第4節 神学の必要性

- イエスを愛しているなら十分ではないのか？
- 1. 信仰者と神との関係...正しい教理的信条が不可欠
  - 1. キリストの神性
  - 2. キリストの人性
  - 3. キリストの復活
- 2. 真理と経験は相互に関係
- 3. 宗教と信仰を脅かすさまざまな批判
  - 銀行員が偽札を見分ける技術

## 第5節 神学の出発点

1. どこから始めるべきか...神論か聖書論か
2. ストロングの『組織神学』
3. トマス・アキナス「五重の証明」
4. 合理的アプローチと経験的アプローチの展開
5. アプローチにおけるいくつかの問題
6. 確証された神はどの神なのか？
7. 聖書から始めること
8. 神についての先行概念なしに啓示は
9. 聖書はなぜ啓示なのか
10. 両方から始めること
11. 神と神の自己啓示がともに前提される

1. オーガスタ・ホプキンス・ストロング:
2. デイル・ムーディ:
3. ルイス・キャロル:
4. 一角獣:

## 第6節 学としての神学

1. 神学は“学”と呼ぶに値する学問？
2. アウグスティヌス：「知識」よりも「知恵」と
3. アクィナス：すべての学問の女王
4. 学として認定する判断基準が厳密に
5. 神学のジレンマ
6. ショルツの六つの基準
7. 知識についての伝統的な基準
8. 他の諸学と共通する領域
9. 神学は独自の位置を占める

1.シグムント・フロイト：

2.ハインリッヒ・ショルツ：

## 第7節 なぜ聖書なのか

1. なぜ、聖書を第一次資料に？
2. すべての組織・制度には明確な基礎が
3. キリスト教は組織ではなく運動
4. キリストに従う形で展開される運動
5. 創始者の概念の再解釈・再適用
6. 寸分変わらない表現形式での継承ではない
7. 一般啓示は第二義的な資料として

1.ルター主義：

2.ルター主義者：

3.フィリップ・メランヒトン：

4.フィリップ派：

## 感想、質問、登録、注文、コピー・印刷、 資料代金・支援献金窓口

- 気軽に下記のアドレスまでメールをお寄せください。あなたのメールをお待ちしています。
- このホームページの資料をプリントアウト、そして再コピーされる場合は、それぞれ与えられた恵みに従って「ICI支援献金」をしていただけたら感謝です。
- [aguro@mth.biglobe.ne.jp](mailto:aguro@mth.biglobe.ne.jp)
- 郵便振替口座番号：01110-0-15025
- 郵便振替口座加入者名：一宮基督教研究所